

～ブレインバンクによる統合失調症の脳研究～

統合失調症は精神疾患の中でも罹患患者が多く、注目されている疾患です。しかし、疾患部位が脳であるため、研究が進まず詳しいメカニズムは明らかになっていません。今回の講演では、丹羽先生が取り組んでいる統合失調症についての最新の研究成果および設立されたブレインバンクについて講演して頂きました。精神疾患メカニズムの解明には罹患患者と健常人の死後脳を比較解析することが必要です。実際、講演して頂いた研究成果ではドパミン受容体 D1 および NMDA 受容体の活性を調節する分子であるリン酸化 DARPP-32 について罹患患者と健常人の死後脳で比較し、罹患患者ニューロンに集積しやすいことを示していました。最新の知見を得るとともにブレインバンクの重要性を改めて認識することができました。また、ブレインバンクへの生前登録において健常人の死後脳が不足する傾向にあるそうです。精神疾患における脳のメカニズムを明らかにするためにブレインバンクが必要であることをより広く、患者以外の一般人にもアピールすることが大事であると感じました。死後脳研究によって多くの精神疾患患者が恩恵を受けることになると思います。ブレインバンクの活動に多くの方が興味を持ってほしいと感じました。



講師：丹羽真一先生



杉野 陽彦 (薬物送達学分野・大学院生)

大槻純男准教授より感謝状贈呈



参加者の感想

日々の研究で、病気の検体の必要性や重要性は痛感している。しかし、丹羽先生が取り組んでおられる「脳バンク」のようなサンプルを集めるシステムに関しては、知る機会は少なかった。日本でも多くのサンプルを集めるためにはどのようなシステム作りが必要か、多数のサンプルを得られるアメリカでの問題点など大変興味深いお話を拝聴することができました。

統合失調症は、言葉ではよく耳にしたり目に入っていたが、今回の講演でより具体的な病態として理解することができた。罹患率が約1% (百人に一人) と非常に患者数も多く、百年の歴史の中で病名も変えられたりと日常無視できない精神疾患であることは、生命現象に関わるものには重要な研究テーマとなった。病因は特定できていないが、脳形成段階による何らかのストレス、御産時の虚血および遺伝的継承も考えられている。様々な研究者が病態解明の研究をしており、中でも最新のツールを用いて脳局所糖代謝のパターンを健常者と比較し、前頭葉付近で画像に特異的なイメージが認められているのに非常に興味深くわかりやすかった。今回統合失調症の基本的な病態、歴史から生物学的な方面からの研究報告もまとめられ、精神疾患について知識を得る良い機会であった。統合失調症という病態を知る良い機会となりました。収集した脳の具体的な利用法についてももっと知りたいと思いました。

